

どうする 円光寺!! 第2弾!!

～順正の甲冑は本物なのか～

桜井中学校2年 平野 宗有

どうする 円光寺!! 第2弾!!

～順正の甲冑は本物なのか～

安城市立桜井中学校 2-D 平野宗有



動機

僕の家は桜井町の円光寺です。僕は昨年の自由研究で円光寺に伝わる、三河一向一揆で討ち死にした第14代住職順正の伝説は本当なのかを検証しました。

その結果、おそらく順正は松平家康(後の徳川家康)軍ではなく水野信元軍との戦い(小川安政の戦い)で命を落とした。その後、少し誇張された部分はあるが、地元で語り継がれてきた順正伝説は事実であろうと結論付けました。

昨年順正について調べている時に円光寺には順正が使用していたと伝わる甲冑があることを知りました。そのことを自由研究に書こうと思ったのですが、父に「そんなのニセモノだろう」と言われ、書くのをやめました。ですが、と気になっていたので、少しでも本物の可能性はないのかを検証してみようと考えました。



↑円光寺の甲冑

三河一向一揆と順正伝説のあらじ

永禄6年(1563)9月、家康方が兵糧米を奪おうと、本願寺派寺院に進入したことから対立し西三河各地で戦となりました。家康配下の家臣には本願寺派門徒が多く、一揆方に味方し寺に立てこもり戦う者や、この機に乗じて反逆する者も現れ、家康の人生での三大危機の一つに挙げられるほど苦しいものとなりました。

各地で戦いが行われた中、家康軍と伯父の水野信元軍が西尾城へ食料等を運び入れたり、本願寺から繰り出してきた一揆勢と小川安政(小川町)で戦闘となります。

一揆勢は果敢に戦いましたが劣勢となり本願寺へ攻め込まれることを危惧した円光寺の順正が、「野寺本願寺空誓(一揆方の大将)とは我の事なり」と敵をあざむいて自害します。家康・元信軍は、敵の大将が亡くなったと思ひ込んで引き返し、本願寺は戦禍から救われました。

その後、永禄7年3月には和議が成立しましたが、寺は破却され、20年間許されることはありませんでした。この戦いを総じて三河一向一揆と呼びます。

※ 広報あんじょう2022年11月号、安城歴史の散歩道6より抜粋



↑順正木像

【検証①】実物の甲冑を調査してみる



まずは実物の甲冑を見てみることにしました。初めて見たのですが傷みが激しく、ずいぶん古いものだと思われ、順正の甲冑である可能性は十分に感じられた。しかし順正は大男だ、と伝わっているわりには胴や背中の部分が小さいように思われた。また、甲冑の知識が無いため、頭・顔・胴・背中を覆うもの以外はどこを守るものなのかも解らず、順正のものかどうかも、まずは甲冑全般を知る必要性を感じました。

【検証②】甲冑について図書館やインターネットを利用して調べる

インターネットや書籍などで調べてみると甲冑は攻撃する武器の進歩や戦法に合わせて変化しており、時代によって違いが見られることが分かりました。順正が生きた時代(戦国時代)の甲冑の特徴が円光寺にある甲冑と一致すれば本物である可能性が高まります。まず甲冑とは甲(胴体部分を守る鎧)と冑(頭部を守る兜)のことを言います。古墳時代から奈良時代にかけては短甲や挂甲、綿甲、綿褌と言われる甲冑がありましたが、形が全く違うため、ここでは中世以降のものを検証してみます。平安時代の中頃から武士が現れ、以後甲冑は武士により改良を重ねられますが、江戸時代が終わるまで使われた甲冑は、大鎧、腹巻、胴丸、腹巻鎧、腹当の全5種類に分類され、胴丸が当世具足へと発展し、戦国時代以降は当世具足が使われます。弦走章(正面に見る章)のありなし、引合(胴の合わせ目の位置)、草摺(腰から下腹部や大腿部を守る部分、1枚を1間と数える)の数で見分けることができます。

	時代	弦走章	引合	草摺	特徴
大鎧 	平安中期 〜 室町中期	あり	右 (別々の)	4間	馬上で弓矢を使い、戦うことが主流だった時代のもので馬に乗った時、4間の草摺が箱のようにすばりと下半身を囲むようになっている。
腹巻鎧 	鎌倉前期 〜 南北朝前期	あり	右	8間	大鎧と腹巻を合体させた鎧。重かざり、腹巻を着たいが格式のある大鎧も着る必要があるという武士の要求に応えたもの。
腹巻 	鎌倉中期 〜 戦国	なし	背中	7間	当初は身分の低いものが着用し、室町時代後半から身分のある武士も着るようになるが、胴丸が当世具足に進化すると衰退していた。
胴丸 	平安中期 〜 戦国	なし	右	8間	平安〜鎌倉時代は歩兵が着用し、軽く動きやすい。南北朝時代から戦闘方法が複雑になると馬に乗る武士も着るようになる。室町〜戦国時代には身分を問わず広く着られ、戦国時代には当世具足に発展する。
腹当 	鎌倉中期 〜 戦国	なし	なし	3間	もともと簡素な形式。腹の正面だけを守り、背中側はまったくの無防備。下級の武士が着用した。

注) 弦走章
— 引合
— 草摺
注) 戦国〜江戸時代初期に胴丸と腹巻の呼び名が逆転した。現在は逆転後の名前での呼ぶことが多いが逆転前の名前でも呼ぶこともある。

○戦国時代以後主流となった当世具足とは？
 胴丸が発展した甲冑。大鎧をはじめとした中世から使われてきた甲冑とは一線を画する形式の甲冑。
 槍や鉄砲などの新しい武器による攻撃にも耐えられる防御力に、集団戦でも軽快に動き回れる
 ように改良された。まさに戦国最強の甲冑！泰平が訪れた江戸時代では、武器の進化がほとんど
 なか。たため、日本最後の甲冑の様式といえる。引合は右で草摺は7間が一般的。

○あらためて、円光寺にある甲冑を見てみます。
 弦走章はありません。引合はというと...そもそも胴の前面と背面が2つに分かれて
 いて、右でも左でも合わせないと着られません。
 草摺も...草摺と言えるような立派なパーツがない...では5種類の中で一番簡素な
 腹当なのかと言われると、それよりは立派だと思います。
 この甲冑のパーツがすべて揃っていないのか、石破損が多すぎてわからないのか、それとも
 武士ではなかった順正や足軽などが使用した甲冑と本やインターネットで紹介され
 ている甲冑に違いがあるのか？結局どの時代かを特定することはできませんでした(;;)



右でも左でも
結ばないと着られない...

【検証③】名古屋刀剣博物館に行ってみる



インターネットで調べてみたところ、名古屋市にある名古屋刀剣博物館
 には約50種類の甲冑が展示されていることを知りました。その甲冑の中
 に円光寺に伝わる甲冑に似たものがないかを調べました。
 しかし、やはり身分の高い武将が使ったと思われる立派な甲冑ばかりが
 展示されており、似ているものを見つけることができませんでした。



似ている甲冑を
探しみた...

ただ、1つ気になることが...
 展示品の中に「童具足」という甲冑がありました。童具足とは、武家の男子
 が初めて甲冑を着る儀式「鎧着初」に使われたもので、材料や制作技法
 は一般の成人用甲冑と同じで、各武家によって鎧着初を行う時期は異なっていた
 ため、幼児用から少年用まで様々なサイズが作られたそうです。



↑ 展示されていた
童具足

最初に円光寺の甲冑を見た時に小さく感じられたことを思い出し不安になりました
 (;;)

【検証④】当事の時代背景から考えてみる

三河一向一揆について書かれた資料や本證寺、円光寺に伝わる由緒書などを読み返し
 ながらヒントが見つからないかを検証してみました。
 三河一向一揆は永禄7年(1564)に一向方と家康方が和議を結び終結しますが、実際
 は一向方の敗北と言っても良いかと思えます。その後の和議交渉は決裂し、浄土真宗の寺院
 は三河から追放され、約20年間許されることはありませんでした。円光寺も同様で、順正の妻は
 7歳の息子、教西を連れて丹波国古市というところへ逃げていました。そして約20年後に
 現在の境内地を寄進され、円光寺を再建したとの記録が残っています。円光寺は
 もともと堀内町形谷にあったが、この時に桜井町中開道は移ると記録されています。

では肝心の甲冑はどこにあたのでしょうか?丹波国へ追放されていったのに戦の道具になる甲冑を持っていくことができたのでしょうか?もしくは円光寺の門徒さんたちが20年間、帰ってくるかもわからない円光寺の住職のために保存していてくれたのでしょうか?また、調べているうちに、三河一向一揆の場面が書かれた糸絵の写真を見ました。



甲冑をつけてない...

「蓮女口絵云 岡崎市本宗寺(大谷派)所蔵」

どう見ても僧侶が甲冑を身に着けているようには見えません。不安は増すばかりです(〜)

【検証⑤】専門家の先生に実際に甲冑を見てもらう

はさりとした結論が出ないので、ヒントを探しに安城歴史博物館に行ってみました。博物館のスタッフのかにお聞きしたところ、西尾市の専門家の先生を紹介してくださいました。先生は一般社団法人日本甲冑武具研究保存会のメンバーで、甲冑にとっても詳しい方です。さそく甲冑の写真を見ていただいたところなんと実際に円光寺へ来てくれて調べてもらえることになりました!



当日は2人の先生が来て下さり、甲冑についていろいろ教えていただきました。まず、甲冑は一揃え全てが同じ作者で同じ時代のものであることはほとんどない。一つのパーツだけ新しいものに替えたり、ときには倒した相手から取り上げたり、様々な理由でパーツごとに違う時代に作られたものがワンセットになって伝えられているそうです。かなり身分の高い武士の甲冑でも、寄せ集めの甲冑であることがよくあるそうです。

そして、当事の人は身体が小さくないのでこれくらいのサイズの甲冑は普通だということ。名古屋刀剣博物館で見た童具足ではないことを教えてくれました。先生は兜を見ただけで桃山時代のものでしょう。とおっしゃいました。瓜形兜という兜で、巾着子のつばに当たる部分に桃山時代独特の特徴があるそうです。他にもパーツごとに見ていただきましたが、ほとんどが桃山時代のものであり、佩楯という太ももを守るものはもう少し新しい時代のものではないかとのことでした。当世二枚胴具足に分類されるそうです。

全てのパーツが揃っており、熊の毛が使われているところや、漆や革の使い方からして、僧侶が着けたものではなくある程度の身分をもった侍大将が使った甲冑であり、また戦国時代には見られない特色が多いため、川原正が使ったものではないとはっきりしました。なにより、先生のおかげでどこに着けるパーツなのかが全てわかり、甲冑らしく並べることが出来るようになりました。

【検証結果】

⑤

残念ながら川貞正が使用した甲冑ではないことが分かりました。ただ約400年以上にわたり大七刀にされてきた甲冑だということも分かりました。その間、歴代の円光寺の人々や門徒さんたちが順正のことや三河一向一揆のことを大七刀に語り継いできた結果として、この甲冑が現在も残っています。この事実は大変貴重なものだと思います。今後も大七刀に保存し、今回の検証で判明したことも含めて、語り継いでいきたいと思っています。

まとめ感想

なんとなく歴史の教科書に出てくる歴史上の資料のように思っていた甲冑でしたが、争いに使われた武具だ、たことを再認識しました。甲冑は古墳時代からあて、戦法や武器の発達に合わせて進化してきました。しかし平和な世が訪れた江戸時代には200年以上、ほぼ変化せず進化することが無かったことを知りました。ペリー来航で再び動乱の世になった時にはすでに時代遅れで、甲冑は役割を終えることとなります。世の中が平和であれば武器は必要なく進化することはありません。今世界中にある全ての武器が甲冑と同じように、歴史上の資料となる日が来るといいと思います。

【参考文献】

- ・名古屋刀剣博物館開館記念図録
- ・イラストでわかる日本の甲冑 渡辺 信吾著
- ・徳川家康 忠秀の甲冑 本山 一城著
- ・日本甲冑の基礎知識 山岸 素夫・宮崎 貞登著
- ・刀剣・甲冑図鑑 徳川家康と家康団 ホビージャパン発行
- ・安城歴史の散歩道【6】
- ・広報あんじょう 2022年11月号
- ・特別展「家康と一向一揆」図録
- ・特別展「三州に一向一揆おこりもうす」図録